さぶちゃん奮戦記 ⑰⑥

―菅原工務店創業物語―

感謝を込めて

菅原　三郎

人生走馬灯の如し―とよく言われますが、古希を過ぎて走馬灯の語源に納得しました。時の流れはいくら焦っても止めることができません。時がたてばたつほど年齢が積み重ねられます。大崎市では七十五歳から敬老会の仲間入りをします。

現在の心境は、まだ敬老会の仲間入りするまで数年ゆとりはありますが、老人扱いしてもらいたくないのが本音です。

さて、予想もしなかった自分の人生を振り返る「企業興し企画」に2016年春、伊藤美彦大崎タイムス社常務から推薦を受けました。さらに「おおさきメガソーラー第二号」が完成し竣工祝賀会式に著者である伊藤卓二さん（大崎タイムス社長）が来賓として出席され、挨拶をいただいたときでした。東北電力、京セラの役員や多数来賓のいるなかで人物伝を依頼され、OKをしてしまいました。

伊藤さんとは私の住まいがタイムス社に近いこともあって仕事を通じて昔から存知あげていました。王城寺原から古川に来たのが昭和四十三年春で、伊藤さんはタイムス入社が昭和四十年秋と聞いており、付き合いも古いことになります。

長男順一の結婚式にも出席してもらいました。長男と伊藤さんの次女野恵さんは古川東中学校の同級生でPTAも一緒でした。長男は古川高校、次女の方は古川女子高校から東北学院大学と同じ大学に進みました。

企業興しの企画で一年間にわたってインタビューを受けました。私がタイムスを訪問し、

走馬灯の人生

約二時間にわたって一問一答を繰り返し、あっと言う間に一年が過ぎ去った感じです。今となっては懐かしい思い出になりました。

連載の中に、とも子ばあさんと倉夫じいさんが孫を抱いている大写しの写真が載りました。すると、とも子ばあさんは伊藤さんと遠縁にあたることがわかりました。とも子ばあさんは不動堂（美里町）の出身で、伊藤さんの親戚が写真を見て教えてくれました。その親戚はタイムス編集局で働いており、タイムスの役員室で親戚名乗りをしました。詳細は省略しますが、不思議な縁で世間はせまいことを改めて知った次第です。

この企画で、私は古希を迎えた人生をじっくり振り返ることができました。インタビューを受けながら、幼いころ、社会に巣立ったとき、燃える青春時代から古川に婿養子となったとき、企業興しに奮闘した時代…、すべてが思い出となりました。上梓した本には私の人生がそのまま凝縮されています。ぜひ、お読み下さい。

取材を受けているとき、大崎耕土が世界農業遺産に認定され、認証式がイタリア・ローマで開催されました。わが郷土・大崎が世界農業遺産になったことから市民参加に応募しました。

とくに、ふるさと王城寺原など船形、栗駒連峰から注がれる大崎耕土は、水田や水路、集村型の屋敷林「居久根」が点在する独特のランドスケープ（景観）を継承することが目的と知りました。この自然を通じて大崎耕土を未来永劫にわたって維持していただこうと願いローマの地を踏みました。

私も命ある限り、企業存続と地域貢献に努力して大崎耕土、そして〝富県・宮城〟となることを祈り、執筆者の伊藤さんに感謝申し上げます。今後、大崎耕土が躍進、発展するため、若い方々の地域づくりに大いに期待します。

最後に妻や家族、会社と関係者のみなさんに重ねて感謝申し上げます。

会社前で全社員集合（2017・8・2）